

## 【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

### orient<sup>1</sup>、東洋（とうよう）と東方（ドンファン）<sup>2</sup>

—orient という語の訳語から日中両国の自己のあり方を探る—

名古屋大学大学院文学研究科 博士後期課程3年 張 鈴

#### 目次

はじめに

#### 1. 前近代・漢字文化圏

#### 2. 近代・日本

##### 2.1 「西洋」の定着と「東洋」という自己認識

##### 2.2 「東洋」を他者として退ける

#### 3. 近代・中国

##### 3.1 「東洋」が「日本」のみを指し示すまで

##### 3.2 「東方」意識の生起と「東洋」（アジア）との並存

##### 3.3 「東洋」と「東方」の競り合い

終わりに

## はじめに

orient という言葉は現代日本語ではよく「東洋」と訳されるが、今日の中国では往々にして「東方」と訳され、「東洋」といえば、日本を想起する人が多い。一方、orient はヨーロッパ中心主義下の概念で、その訳語の定着過程には、中国中心的な前近代から西洋中心の近代への移行過程にある日中両国のアイデンティティを映す。「東洋」が日中両国の言語内部にある意味変遷および「東洋」の両国間の輸出入、迎合と排除の歴史をめぐる研究は、言語学や翻訳研究だけではなく、比較思想史を射程にいれてとりあげるべき二重の価値があると思われる。

小論は、以上のような意識をもち、前近代における orient が中国語の「東洋」に訳され、日本語に入り、および近代における（日本語の）「東洋」から（中国語の）「東方」へのスパンの長い過程を注目しながら、「東洋」の意味変遷、そして過去の思想的資源とのかかわりを追究し、さらに orient = 「世界の東にあること」という考えの越境が、日中両国の自己認識と他者認識にどのような影響を与えたのかを考えたい。

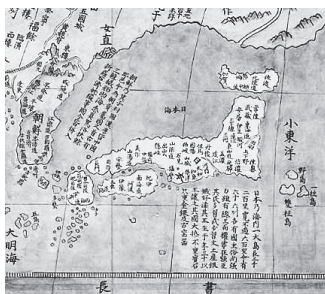
1 自己オリエンタリズムを避けるために、筆者は TANAKA および李の Orient ではなく orient で表記することに賛成し、それに従う。(李圭之『近代日本の東洋概念：以中国与欧米為経緯』(台大政治系中国中心、2008年)、Stefan TANAKA 著“Japan’s Orient: Rendering Past into History”(California, 1993)を参照。)orient にはいくつかの意味があるが、小論はこのことについて議論しないことにし、便宜をはかり、orient を the East の同義語、アジア、世界の東にある部分として扱う。また、歴史文献を引用する際に、現在において相応しくない表現があるが、それは筆者の意思を示すものではないことを予め断る。

2 小論は同形の語である日中両国語の東洋、東方を多用するので、区別のために中国語か日本語かを明記する。あるいは、語句の後に括弧を使ってその意味を提示する。

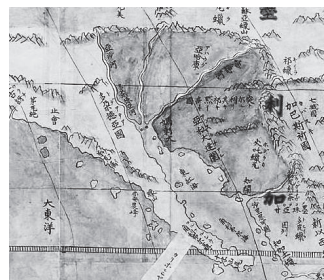
## 1. 前近代・漢字文化圏

「東洋」という語は中国発だ。宮崎市定は、14世紀中葉の『島夷志略』の中で、中国の南海の東側が「東南洋」と呼ばれ、簡略化された「東洋」も散見すると指摘している<sup>3</sup>。これは恐らく最初の用例であろう。

マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1552-1610) は当時もっとも正確な地図と言われるオルテリウスの地図帳 (図1、右<sup>4</sup>) を中国に持ち込んだ。彼は中国語にすでにある「西洋」、「東洋」の語彙を、Oceanus Occidentalis (西の大洋) と Oceanus Orientalis (東の大洋) というラテン語の訳語に使い<sup>5</sup>、「小」(近い)、「大」(遠い) と組み合わせ、彼の所有する地図を中国語に翻訳した (『万国輿地全図』、『坤輿万国全図』など)。オルテリウスの地図帳では、中国や日本は地図の右上の角を占め、文字通りの「極東」(far East、中国語：遠東) だが、中国人に受け入れられやすいように、マテオ・リッチは中国を世界の真ん中に配置し、日本



本周辺を「小東洋」(図2、左)、メキシコ周辺を「大東洋」(図3、右<sup>6</sup>)、インド洋を「小西洋」と誌し、自らを「大西洋人」と称した。このような地図はまさに



ヨーロッパの地理知識を用いた中国中心的世界像と思われる。一方、マテオ・リッチが定義した「東洋」は中国人学者の「東洋」の系譜に属していない。張燮の『東西洋考』(1617年)には、「小東洋」が見られるが、それは台湾澎湖島を指す。日本はまだいわゆる「東洋海夷」の列国の仲間に入っていなかった。清の陳倫炯『海国見聞録』(1730年)は、世界の海洋を「東洋」、「東南洋」、「南洋」、「小西洋」、「大西洋」などに分け、その一章である「東洋記」では、日本のことだけを記した。日本は「東洋」(中国の東の海洋)

3 宮崎市定「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」、『東洋史研究』、第7巻第4号、1942年8月。

4 オルテリウス編集『世界地図帳』(Theatrum orbis terrarum)  
<http://www.artsconnected.org/resource/61659/map-of-the-world-from-theatrum-orbis-terrarum-theater-of-the-whole-world-antwerp>より、2011年11月18日アクセス。

5 陳瑋芬「自我的客体化——近代日本的「東洋」論及隱匿其中的「西洋」与「支那」」、『中国文哲研究集刊』、第18期、2001年3月、P8。

6 図2、3は『坤輿万国全図』の一部。  
[http://dbr.library.tohoku.ac.jp/infolib/user\\_contents/kano/ezu/kon/kon.html](http://dbr.library.tohoku.ac.jp/infolib/user_contents/kano/ezu/kon/kon.html)より、2011年11月18日アクセス。

にあるという認識は清においてすでに確立したが、後で考察するように、清の時代において、「東洋」にはまだ雑多な意味が含まれ、日本だけを指すものではなかった。

中国中心的な『坤輿万国全図』が日本にも持ち込まれたが、宣教師などによって日本は西洋中心的な地理知識を直輸入し、中国より早く自国が「世界の東」にあることを認識した。1709年、幕府官僚の新井白石は『坤輿万国全図』を参照しながら、日本に潜入したイタリア人のカトリック司祭ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ（Giovanni Battista Sidotti, 1668-1714）を尋問し、その結果を『采覧異言』（1713年）と『西洋紀聞』（1715年）にまとめた。『西洋紀聞』には、「我国、東に僻りて最小しき也」、「我国、ひとり東にあるのみならず、チナもまた東にありて」<sup>7</sup>というような記述がある。すなわち、18世紀初頭に日本はすでに、自らが「世界の東」にあると認識していたのである。

後に、日本語において、「大西洋」という名は残されたが、「大東洋」は「太平洋」に、「小西洋」は東洋にと収束した<sup>8</sup>。

## 2. 近代・日本

### 2.1 「西洋」の定着と「東洋」という自己認識

井上哲次郎は江戸末期の「西洋」の定着について下のように証言している。

この時代に、三田の福澤諭吉（一八三四—一九〇七年）はいろいろの著書を発行した。その中でも、『学問のすすめ』、『西洋事情』、『福翁百話』などいふものは、余程広く購読された。その頃、西洋のことを遠西とか、泰西とか西国とか云つて居たが、『西洋事情』から殆ど一定して来たようである。勿論、西洋という言葉は昔からあつたことで、既に新井白石も『西洋紀聞』を著はして居る。けれども明治以後、福澤の『西洋事情』が出でてより欧米を指して西洋といふことに一定した。[傍点：井上]<sup>9</sup>

『西洋事情』が出て「欧米を指して西洋といふことに一定した」ことが周知されているが、実際はそうに限らない。『西洋事情』より遅く世に出た『万国奇談』（1873年）は、現在の太平洋を「大東洋」（図3を参照）と「寧海」という二つの部分に分けて表記する『坤輿万国全図』の方法を受け継ぎ、「大東洋」と「太平洋」と表記する例が見られ、「大東洋」が北アメリカ大陸の西側に記される。いいかえれば、『西洋事情』の時代、アメリカが「東洋」区域に属するか「西洋」区域に属するかについて、まだ完全な合意はなかったのである。「大東洋」が使われなくなる過程、即ち「太平洋」（最初の訳語は寧海（『坤輿万国全図』）、静海）が、南アメリカ大陸の南端の西側からだんだん北上して「大東洋」を包摂した過程は、日本人の地理知識と世界認識の発達する過程とともに、アメリカが地理的かつ文化的東洋より、西洋のほうに近いと認められるようになる過程を示す。この

7 新井白石著、宮崎道生校注『新訂 西洋紀聞』、平凡社、1968年、P77、P80。

8 日本におけるこの収束と調整の過程については齋藤毅『明治のこぼ』（講談社、1977年）を参考。

9 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」、『岩波講座 哲学』、岩波書店、1933年、P15。

「位置」変化は、日本が中国中心の世界観から、ヨーロッパ中心の世界観に移行している過程を証左するものでもある。「小西洋」が「東洋」に収束した過程は、アメリカが「東洋」から「西洋」への「移動」と方向が違うが、その実質は同様に、「東洋」と「西洋」の再編である。

福澤の本が大きな影響力を持っているとはいえ、人々に「西域」、「西州」などの語を排他的に使わせるまでには至らない。「西洋」が定着する原因は、「東洋」の定着を合わせて考えるべきである。まず、「西域」、「西州」、「西国」の用例が見られるが、対義語の「東域」、「東州」、「東国」はあまり使われなかった。泰西は泰東という対義語があるが、泰東が orient より、far East (極東) に近い意味で捉えられていたのである。加えて、「東洋」の一番有力な競争相手である「東方」は、19世紀の文献では日本を指し、「東方」の対義語である「西方」の用例は仏教用語として使われており、欧米を指す「西方」はあまり見られない<sup>10</sup>。それらの言葉と異なり、「東洋」と「西洋」は地名を示す固有名詞として広く知られており、「東洋」と「西洋」の再編は終始この二つの単語において行われ、「東洋」の流行は「西洋」の定着を助け、「西洋」の定着は逆に「東洋」の定着を進めると考えられる。

「東洋」・「西洋」という単語の定着の過程は、自己と他者を認識する過程である。「西洋」に対する認識が深まるとともに、日本は「東洋にある国であること」という認識を深めるのだ。

## 2.2 「東洋」を他者として退ける

「東洋」と orient (そして「西洋」と occident) が「翻訳」によって結ばれ、英語における東西 (orient-occident) 対立が「東洋」対「西洋」の形で日本 (語) に入ったように見えるが、日本人はその対立の本質である〈西洋対非西洋〉(the West-the rest) を最初から見抜くことはなかった。「東洋」における範囲規定の難しさは、orient の訳語として使われるようになる時からすでに内包している。つまり、「東洋」は「反西洋」ではなく、「非西洋」であることに由来している。とくに、「アジア」と比べれば、「東洋」の範囲規定の方がはるかに曖昧である。日本は脱亜と入亜の両極に揺れていた (理念上の「アジア」に含まれるか否か) が、「アジア」の地理的範疇を疑ったり、「アジア」を再定義したりした動向はみられない。一方、「東洋」について学者各々の定義があるが、終戦までの「東洋」を巡る言説にアジア、特に中国など極東の国々が論議の中心とされ、日本が「東洋」から除外される場合がある<sup>11</sup>。

「東洋」という語の意味を書き換える営みは、「東洋史学」、「東洋哲学」や「東洋学」などの学問の研究活動が代表的だ。「東洋の学問は東洋人が従事すべきだ」という発想から出発した日本の「東洋哲学」、「東洋史学」は、西洋の学問を修める方法で「東洋」

10 齋藤毅の研究によると、杉田玄白の『蘭学事始』(1815年)や西周の『訳利学説』(1877年)には、「東方」の用例が見られ、日本をさしていた。しかし「西方」の語は「あまりみあたらない」。『明治のこぼれ』、P68。それは、「西方浄土」という言葉があり、「西方」という言葉がすでに仏教の用語として定着したためかもしれない。

11 王屏「日本人の“中国観”の歴史の変遷について」(西本志乃、盧壽訳、『広島大学マネジメント研究』、第4号、2004年) P264。

を研究しようとする。これは欧米諸国と競争する意識の表れであると同時に、一種の「セルフ・オリエンタリズム」である<sup>12</sup>。

井上哲次郎は日本が「東洋哲学」に従事すべきだと提唱した第一人者だ。彼は自らを「東洋人」、日本を「東洋の国」と位置付け、「東洋哲学」に従事したきっかけを以下のように述べている。

西洋の哲学者が希臘以来の哲学のみを哲学として考へたのが間違ひである。印度だの支那だの哲学も考慮に入れなければならぬ<sup>13</sup>。

東洋哲学を研究して西洋哲学と比較対照して、そして一層進んだ哲学思想を構成するといふことは、東洋人としては最もその方法を得たものと考へられる。殊に、印度哲学、その中でも支那、日本に発達した仏教哲学の中に大いに哲学上考慮すべきものがある<sup>14</sup>。

井上より9歳上の中江兆民は「日本に哲学なし」と嘆いたが、井上は積極的に「東洋哲学」の研究を展開する意欲を見せた。しかし、「日本哲学」ではなく、「東洋哲学」を発展させようとする意図は、東洋史学者津田左右吉が批判しているように、「西洋に対抗するに当つては、日本としてよりもいはゆる東洋としての方が心強かつたのである」<sup>15</sup>。

井上哲次郎は「東洋史学」の最初の提唱者でもある。彼は1891年の講演「東洋史学の価値」において、従来の「中国史学」の方法論ではなく「西洋史学」の方法に従い、実証を重視することを唱えていると同時に、学者たちが「東洋史学」に従事すべきだと力説している。しかし、その中から、「日本」が「東洋」の歴史を研究する動機はなかなか見つからない。彼は

東洋の歴史を研究すれば、それに伴つて、我国に非常に有益なる結果を生じます。それは我国人をして、愛国心を惹起さしむるのです。吾国の来歴が分つて、自分の国体が明らかになつて来ると、自然己れの国を愛する精神が、それと俱に起る事は、疑ひ無いことです。国学者流は、我国の歴史を能く読で居るから、愛国心に富で居りませう己れの国の歴史を研究すれば愛国心が自ら起るのは、当然のことです。要するに〔傍点：引用者〕、東洋歴史の研究は、学問社会一般に利益を与へる事業です...<sup>16</sup>

---

12 章益国「亞洲論述：歴史与価値」、盛邦和、井上聡主編『新亞洲文明与現代化』、学林出版社、2003年を参考。

13 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」、『岩波講座 哲学』、岩波書店、1933年、P85。

14 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」、『岩波講座 哲学』、岩波書店、1933年、P86。

15 津田左右吉「東洋文化とはなにか」、『シナ思想と日本』、岩波書店、1938年、P111。

16 井上哲次郎「東洋史学の価値」、『史学会雑誌』、1892年、第26号、P10-11。原文は変体仮名が含まれる。便宜を図り、ひらがなに改めた。

のように、「東洋史」の研究はヨーロッパ人に「東洋」の歴史を「知らしむる」だけではなく、日本にも愛国心を引き起こす「有益なる結果」をもたらすということを繰り返している。そして、「東洋歴史の研究は、学問社会一般に利益を与へる事業です」という結論にまとめている。日本の来歴、日本の国体、そして日本の歴史の研究をすると、日本を愛するようになるはずであるが、東洋の来歴、東洋の歴史（むろん東洋の国体というものは存在しない）を調べ、日本を愛するように仕向けるのは、遠回りをするようで、おかしなことである。東洋という、より大きな歴史に自国の歴史の傍証を求めるのは自国の歴史に自信がない日本知識人の心細さを表すと思われる。

哲学の分野では日本は「日本哲学」ではなく、「東洋哲学」をもって「西洋哲学」に抗しようとした<sup>17</sup>。一方、歴史の分野では、日本は自己を「西洋」と「東洋」の対立から除外し、歴史を西洋史、東洋史と日本史のように三つに分けた。この矛盾は意味深い。その原因について、「日本の過去に於いては、今日一般にいはれてゐるやうな意義での哲学と称し得られるほどのものが無かつたのと、別に日本史が存在する」<sup>18</sup>という津田左右吉の見解はもっともである。すなわち、「東洋」は日本にとって都合のよい概念にすぎない。日本の歴史が存在する場合、日本史を東洋史から分離し、独立した分野として作り上げる。哲学のような、日本になかった学問にいたると、日本より大きな範疇（「東洋」）でその学問を求める。

明治後期から、日本が「東洋」（特に中国）との連続性を切る傾向がますます強くなった。日本を「東洋」の一部と見なさないとする理論、例えば那珂通世の東洋停滞論や白鳥庫吉の堯舜禹抹殺論、津田左右吉の東洋文化抹殺論が続々と登場した。これらの東洋言説に関して、王屏、陳偉芬、甘文傑、李圭之などの労作で批判が行われたので、小論では割愛する。

それだけではなく、「東洋学」において日本は自国を「東洋」から除外した上での東洋軽蔑の動きが見られる。「東洋学」に関する覚書で布村一夫は、「東洋学」の内容と研究対象に対する質疑から出発し、「東洋学」は19世紀初頭のフランスで成立し、「支那学」に由来して「支那学」に基づいた学問であると考察した。そして、欧米の論文を引用し、「東洋学」はまだ充分な発展に至らず、さらに細かく分けられないため、「東洋学」という大雑把な名称しか持たないという結論を出した。欧米における「東洋学」で日本を論じた部分<sup>19</sup>について、「日本に関する知識が19世紀初頭において非常に浅薄であつたためとも考へられる」と述べ、欧米の日本認識を日本の鎖国政策に帰し、日本と中国（東洋）の違いを強調した。

太平洋戦争勃発前夜、谷川徹三のような「東洋」が文化的に一つで、中国と日本は近

17 例えば『日本国語大辞典』（第二版）は、東洋哲学を「東洋諸国、特にインド・中国・日本などに発展した固有の哲学」と解釈する。

18 津田左右吉「東洋文化とはなにか」、『シナ思想と日本』、岩波書店、1938年、P115。

19 「マルサス師は「日本の状態は極めて多くの点に於て支那のそれと類似し、随つて之を詳細に研究する事は徒らに反復を重ねる丈であらう」（前掲二五五頁）として僅か一頁余りで逃れてゐるのである」、布村一夫、「東洋学」に関する覚書、『書香』、満鉄大連図書館編、1943年3月号、P39、復刻：緑蔭書房、1992年。

縁性があると主張する学者も現れた<sup>20</sup>が、それもやはり日本のアジア・ヘゲモニーのための論説である。「西洋」と対抗する意味で一体になる「東洋」という想像の中に、日本人が特殊だという考えが潜んでいる。

要するに、学問研究の対象としての「東洋」は、欧米の学者によってそもそも中国を中心とするアジアに設定されたが、日本の一部の学者による研究では、「東洋」を「未開、野蛮」と結び、日本はそのような「東洋」に属しないと主張した。その結果、日本は欧米と競争して「東洋」を研究することになり、それによって「未開、野蛮」の「東洋」を日本の他者、すなわち中国などの地域に押し付けた。一方、「東洋」を文化的の一つと見なし、それをもって「西洋」と対抗しようとする動向が、太平洋戦争下にも動いていた。

### 3. 近代・中国

#### 3.1 「東洋」が「日本」のみを指し示すまで

orient の訳語としての「東洋」を巡る日本のコンプレックスを述べてきた。即ち、最初は「東洋」という語を自己認識として受け入れたが、のち自らを東洋＝野蛮から排除しようとし、戦時下はまた一転して「東洋」、「東亜」、「大東亜」など多くの言葉を駆使して〈アジア共同体〉を構築することを企てた。では、中国は orient をどのように受け入れたのだろうか。第一節において、中国では、「東洋」という言葉は元朝末期に現れ、「南洋」の一部を指したことを触れた。近代に入った中国において、「東洋」は日本語の影響を受けて「アジア」という意味を持つようになった。そして、中国では「東洋」と「東方」の競合が発生し、最終的に「東方」が orient の訳語に、「東洋」が日本を指すことに定着した。

元朝末期に現れた「東洋」は、その海域における針路、その針路沿線の国<sup>21</sup>、そして文学作品に、架空の海洋を指すことがある。葛兆光は、清朝中頃から人々が「東洋日本」という言葉を使ったことに対し、それは東洋にある国＝日本という意味であると説明し、西洋諸国と並べられた観念的な「東洋」＝日本が現れるのはかなり遅い時期と推測している<sup>22</sup>。筆者は「漢籍電子文献資料庫」<sup>23</sup>と「古代漢語コーパス」<sup>24</sup>を使って、清朝

---

20 谷川徹三「東洋と西洋」、『中央公論』、1938年11月。

21 王屏（「日本人の“中国観”の歴史の変遷について」）は「東洋航路は金門島を出発し、澎湖島を経由してルソン島に到り、さらに南下してジャワ群島かあるいはボルネイの北岸に至る航路である。そして西洋航路はボルネイから出発してジャワあるいはスマトラの方向に向かい、インドシナの東岸に沿って澎湖島、金門島に帰る航路のことである」とまとめている（P263）。

22 葛兆光『中国思想史』（巻二）復旦大学出版社、2001年、P673。

23 「漢籍電子文献資料庫」（<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>）は台湾中央研究院・歴史語言研究所が作成したDBで、経史子集の四部を収録している。表1では「漢籍電子」で記す。

24 「古代漢語コーパス」（<http://www.cncorpus.org/acindex.aspx>）は中国教育部語言文字応用研究所が作成したDBで、四庫全書の大部分を含む周から清まで各朝の資料約一億語のテ

のテキストにおける「東洋」の用例<sup>25</sup>を下の表にまとめ、考察してみる。

表1 清朝(1636-1911)における「東洋」の使用状況(年代順)

番号	コーパス	書名	時間	用例	東洋の意味
例1	古代漢語	『風流悟』	明末清初	将平日一段光明正大的念頭, 抛向東洋大海里去了。	(架空の) 海洋
例2	古代漢語	『聊齋志異』	1680年完成	云是〈東洋三世子〉。	(架空の) 海洋
例3	古代漢語	『明史』	1739年完成	東洋不産丁香	針路沿線の国家
例4	古代漢語	『明史』	1739年完成	東洋尽処, 西洋所自起也	(地名の) 海洋
例5	古代漢語	『明史』	1739年完成	馮嘉施蘭, 亦東洋中小国	(地名の) 海洋
例6	古代漢語	『紅樓夢』中	1784年完成	溫柔一旦付東洋	(地名の) 海洋
例7	古代漢語	『紅樓夢』下	1784年完成	都付于東洋大海了	(地名の) 海洋
例8	漢籍電子	『閱微草堂筆記』	1789-98年	東洋自日本以外。大海中三島十洲。崑崙五城	(地名の) 海洋
例9	漢籍電子	『清史稿』 <sup>26</sup>	1874年	「東洋駐長江口外」	(地名の) 海洋
例10	漢籍電子	『清史稿』	1881年	「先赴東洋試行」	針路沿線の国家
例11	漢籍電子	『清史稿』	1885年	「以後豆石漸多流入東洋」	日本
例12	古代漢語	『狐狸縁全伝』	1888年出版	一旦付之東洋大海	(架空の) 海洋
例13	漢籍電子	『清史稿』	1889年	「宜於西洋, 宜於東洋, 豈其獨不宜於中国?」	日本
例14	古代漢語	『官場現形記』	1903年出版	這番跟了王道台出来, 原説同到東洋去的,	日本
例15	古代漢語	『官場現形記』	1903年出版	也不跟王道台去東洋, 只打点着要往浙江昇任	日本
例16	古代漢語	『官場現形記』	1903年出版	只得喚了兩部東洋車	日本
例17	古代漢語	『官場現形記』	1903年出版	前往東洋考察学務	日本
例18	古代漢語	『老殘遊記』	1903年発表	把這雄心便抛入東洋大海去了。	(架空の) 海洋

キストを収録している。表1では「古代漢語」で記す。

25 中国では「東洋河」、「東洋村」のような地名がある。ここで二つのコーパスの中の地名としての東洋の用例計12個を略す。

26 『清史稿』(1927年完成)は民国初年の知識人によって書かれたので、直接引用のことば(「」で記す)でなければ信憑性はやや低いと思われる、この表に収録しなかった。(収録しなかった用例は4つあり、海洋の意味が1例で日本の意味が3例。)直接引用のことばはコンテキストや上奏文の原文によって、公開される年を推算して「時間」欄に記入する。



例 19	古代漢語	『老殘遊記』	1903 年発表	象放那東洋煙火	日本
例 20	古代漢語	『女媧石』	1904-05 年 出版	我看今日之問題，非西洋的而東洋的，非白種的而黃種的	アジア
例 21	漢籍電子	『清史稿』	1907 年	「以立憲為即可施行，不審東洋之近事」	日本
例 22	漢籍電子	『清史稿』	1908 年	「惟日本憲法，則纂自日臣伊藤博文，雖西國之名詞，仍東洋之性質」	日本

以上の 22 の用例のうち、10 例が海洋、9 例が日本、2 例が針路沿線の国家であり、アジアを指すのは例 20 だけだ。例 21、例 22 は、清朝末期「考察憲政大臣」於式枚 (1853-1916) の上奏文の一部でもある<sup>27</sup>。上奏文のコンテクストを読むと、

日本の憲法だけが、日本の大臣である伊藤博文によって編纂され、西国の名詞でありながら、東洋の性質をもつ。日本の憲法はドイツのそれを多く取り入れた。ドイツのほうはドイツの君臣が定め、欽定と名乗るが、その実は他の国と違う。この二つの国の憲法は戦勝の余威をかるもので、実に通用する制度ではないと思う<sup>28</sup>。

日本の憲政を考察した於式枚は、日本の憲政はドイツを手本とし、日独両国の憲法が他の国のそれと違うことを指摘したことが分る。「東洋」という言葉遣いはアジア諸国の連帯や日本との親しみを示すのではなく、単に「日本」を指すだけにすぎない。この「西国」と「東洋」の対句は、中国を日本と欧米とともに並べた見方を表しているのである。

以上の表と分析から、清朝における「東洋」の意味を把握することが出来るだろう。「東洋」は主に「海洋」、「日本」と「針路沿線の国」を指す。例 8 と例 9 は百年ぐらゐの隔たりがあり、それによって「東洋」(海洋) から「東洋」(日本) への切り替えがいつ行なわれたのか精確に知ることは出来ない。補足として「晚清期刊全文データベース (1833~1911)」<sup>29</sup> で調べた結果、1869 年に、東洋が初めて雑誌に登場したことが分かる。『中国教会新報』では「中国東洋信息大畧」(日中情報要約) があり、そこに、「美国姜先生於外国十一月到東洋長崎因東洋有一官請去也」(アメリカにいる姜先生が西暦 11 月に日本長崎に到着。一人の日本官僚に招待されたため。) が記録される。最初の用例がこのように 1869 年に現れるが、その年、4 つの用例もある。よって、1869 年以前のほかの資料に用例が存在しているかもしれない。「東洋」で「日本」を指すようになって

27 『清史稿』はその上奏文の一部しか引用しなかった。

28 於式枚「考察憲政大臣於式枚奏立憲必先正名不須求之外国折、故宮博物館明清檔案部編『清末籌備立憲檔案史料 上冊』、中華書局、1979 年、P336。翻訳：筆者。

29 「晚清期刊全文データベース (1833~1911)」([http://218.1.116.100/shlib\\_tsdc/index.do](http://218.1.116.100/shlib_tsdc/index.do)) は中国上海図書館が作成した DB で、302 種類の、「当時のほぼ全部の雑誌」を収録している (当 DB 紹介より)。

たのは、19世紀後半の現象であることは間違いないだろう。

1904年、桑原隲蔵の『中等東洋史』（後『東洋史要』に改称）は中国で、第二版が刊行された。その時期に、例20のような、アジアと同じ意味を持つ「東洋」が中国語に現れてもおかしくない。なぜかと言えば、1898-1912年の十余年間、日中関係が比較的穏やかにあり、日本の知識と思想の受容に伴い、日本の言葉も中国に多く入ったと推測されるからである。

「東洋史」の中国受容は晩清学制改革と切り離して考えられない。当時の清国政府は中小学校に歴史の授業を設置したが、相応しい教材が見つからず、既成の外国の教科書を翻訳・編集して危機を切り抜けようとした。そのため、20世紀初頭、中国人は日本人の「シナ史」や「東洋史」を翻訳して中国史およびアジア史に当てていた<sup>30</sup>。

『中等東洋史』は〈京師大学堂裁定史学教科書〉であり、わりあい影響が大きい。この本は1899年（日本で初版が出された次の年）に中国で訳本が出された<sup>31</sup>。『重訳中等東洋史』の「訳者序」で、訳者周同愈は次のように述べている。

桑原隲蔵君は日本人で、自らの国を愛し、その心を宣揚している。訳者は中国人でそのまま訳して改易しないならば、愛国心がどこにあるのか。そのため、重訳することをした。文章は筋道が立っていて文法上のまちがいがいかにないの求め、推敲を繰り返し、すべての国の治乱と重大事件を中国の年号でまとめ、3ヶ月を経て全書を完成した。訳者が勤勉で、注意を怠るのをしない原因は、ほかにあるのではなく、自分の愛国心で読者の愛国心を起こしたいのだ<sup>32</sup>。[傍点：引用者]

井上の東洋史学をすすめた理由は日本民衆の愛国心を起こすことにある。歴史が愛国へと繋がることについて、桑原隲蔵は触れたことがないが、この訳者序からみれば訳者ははっきり意識している。原文が漢文であり、そのまま読んでも理解できるが、自分が著者と異なる国の人であり、テキストを変えずにそのまま従えば、日本人の立場に立って歴史を解釈することになる。そのため、訳者は言葉遣いを推敲し、中国の年号に変えてこの著作を「翻訳」と宣言している。そこから、中国人は警戒心を持って日本の知識を学んでいることが分かる。

中国人は「東洋」がアジアを指すということを受け容れたが、この単語の背後にある日本中心の視点を警戒していた。「東洋」という言葉の内容の書き換えに努めていた中国人は1935年まで、中国人なりの「東洋史」を書くことを試みていた<sup>33</sup>。また、「民国

30 李孝遷「清季支那史、東洋史教科書介訳初探」、『史学月刊』、2003年第9期を参考。

31 東文学社によって出版された。翻訳者は樊炳清だと指摘する研究があるが、筆者は実物を見ていないので、定かではない。

32 桑原隲蔵著 周同愈訳『中等東洋史』、上海文明書局、1904年、P2。章清「晩清中国闡述“亜州”所延統的“歴史記憶”」（『東亜的知識交流与歴史記憶』、韓国東北亜歴史財団、2009年、P231）から引用。翻訳：筆者。

33 章賦瀾編著した『東洋史』（世界書局、1935年）は中国人が書いた東洋史の中、一番新しいものとされる。

時期期刊全文数拠庫（1911～1949）」<sup>34</sup>で「東洋史」をキーワードとして検索した結果、その語の最後の用例は1937年藤枝晃の「東洋史“学界展望”与“論文目録”一覽」の訳文であり、その後、「東洋史」の姿が中国語に消えた。それは「東洋」と「東方」の競争の結果であり、日中関係を考えに入れなければならない。1937年、日中戦争が勃発した。戦争とはいえ、日本の在中国文化・科学研究所は研究を続けた。また、日本占領区において、日本文化を紹介する活動が積極的に行われた。「東洋史」の雑誌からの突然な失踪は、中国人が意識的に「東洋史」を避けたとしか考えられない。歴史を三分する日本のやり方は1930年代まで中国国立中央大学のシラバスにみられる。中国が日本を模倣した努力、換言すれば、中国へ向かって「東洋」という概念を輸出しようとする日本の努力はとうとう水泡に帰した<sup>35</sup>。

なお、清末民初の時代、「日本」を指す意味はなお存在していた。例えば日本人が発明した人力車が「東洋車」、日本の安い布が「東洋布」と呼ばれていた。

### 3.2 「東方」意識の生起と「東洋」(アジア)との並存

日本が西洋に対面し「東洋」と「西洋」として自他を分けたように、中国でも似たような経験をしてきた。ただし、「西」と対偶になる語は最初に「中」、その後、「東」が加えられる。さらに、その「東」が「東洋」か「東方」かに至っては、一時期、論考の外であり、次の節で検討する。

17世紀、「西学」という言葉が<sup>36</sup>在華イエズス会士アレーニ（Giulio Aleni, 1582-1649）によって作られた。この語が外国人によって作られたことは意味深い。西学という言葉とカテゴリは長い間存在していたが、中国知識人に無視されていたのである<sup>37</sup>。中国人は18世紀中頃に至って、ようやく「西学」に直面するようになり「西学」と区別して「中学」という語で中国古来の学問を命名した。

orientを意味する「東方」は長い歴史を持たない。『清史稿』を調べると、「東方」の用例は76個あり、その中の73箇所は日が昇る方向を指す。1箇所が判断しにくいものの、2箇所が西洋と対立する東洋（orient）の意味と確認することができる<sup>38</sup>その

34 「民国時期期刊全文数拠庫（1911～1949）」（[http://218.1.116.100/shlib\\_tsd/index.do](http://218.1.116.100/shlib_tsd/index.do)、同「晚清期刊全文数拠庫（1833～1911）」）は中国上海図書館が作成したDBで、1911～1949年（民国時期）出版された二万以上の種類の雑誌、千万篇弱の文献を収録する予定で、2012年10月現在は7000種類の雑誌が収録されている。これらの雑誌は上海図書館の所蔵を中心に作られたから、収録雑誌の地域的な偏りは避けられないと思われる。

35 王元周「中国史学的周辺視野——以亞洲史的沈浮為中心」（韓国東北亞歴史財団主催国際シンポジウム「從中心与辺縁看東亞」の発表、2007年12月9日-12日）を参考。

36 「西学」という言葉ははじめに西洋の自然科学を指していたが、近代に入って意味が広くなり、西洋の近代文化を指すようになった。（馮天瑜『新語探源—中西日文化互動与近代漢字』、中華書局、2004年、P194）。また、「洋学」に近い意味をもつ「西洋学」ということばは日本で、1828年『海内医林伝』ではじめて使われるようになった。（前掲書、P327）。

37 張瀨「晚清思想發展試論——幾個基本論点的提出与検討」、姜義華 等編『港台及海外學者論近代中國文化』（重慶出版社、1987年）、及び葛兆光『中國思想史』（卷二）を参考。

38 「古代漢語コーパス」で検索した結果は「方向」や「苗字」であり、「漢籍電子文献資料庫」

中、1つは1896年李鴻章がロシアを訪問するとき、「外国人は平素、鴻章を敬慕し、至るところに礼遇し、みな東方のビスマルクと称する」<sup>39</sup> ことであり、もう1つは辜鴻銘(1857-1928)が晩年「日本人に東方文化の講義を招待され、数年にわたって日本に滞在してから帰国した」ことである。また、「晩清期刊全文データベース(1833-1911)」で調べた結果、「東方」の用例は1872年から現れたが、用例は、「英国東方使臣紀略」(『協会新報』、1872年)や「大英国事：前任駐中国阿欽差論東方時事」(『万国公報』、1875年)のような記事で見られる。これらの用例は、政治の分野が圧倒的に多く、宣教師によって作られた雑誌や新聞に見られ、外国語(英語)からの翻訳色が強い。中国人が主体的に「東方」を使って自己を表現するのは、20世紀に入って「中学西学之争」、「旧学新学之争」など一連の論争が展開されてからである。

五四運動(1919年)前後に起った「東西文化論戦」は、一連の中西論争の延長線に置くことができる。東西文化論戦の二元対立構造は、その前の「中学西学」論争の構造を受け継いだ。清末に人々は「中学」をもって「西学」に抗しようとしたが、民初には「中国」を持って「西方」に抗しようとする。その時からようやく、「東方」が現れるようになった。

この論戦の主な論者の文章を読めば分かるが、論者は〈中・東〉か〈西〉かの立場でそれぞれの論述を展開したが、「東方」と「東洋」を分けて使わなかった。例えば、この論戦を挑発した陳独秀(1879-1942)の「東西民族根本思想之差異」では、〈西洋民族〉と〈東洋民族〉との対比が述べられる。その文章に答えるため、杜亜泉(1873-1933)は〈西洋文明〉と〈吾国文明〉の特徴を論じる「静的文明与動的文明」を発表した。陳の視点は東西の対比だが、杜のそれは中西の対比である。その後、陳は再び反論をしたが、杜の視点との差についての発言はなかった。つまり、陳は「中」と「東」の違いを不問に付しているのである。実際、西洋化論者の代表である陳独秀も、その反対の立場にたつ東方文化派のリーダーである杜亜泉も、「東洋」と「東方」を交えて文章の中で使っていた。

けっして多くはない文献資料だが、中国人が「東方」と「東洋」をアジアの同義語として使う歴史が100年強であることが分かる。17世紀、マテオ・リッチははじめて中国人の「天円地方」の世界観を否定したが、中国中心の世界観を変えることにチャレンジせず、その考えに応じて極東にある中国を世界の中心に移した。19世紀中頃まで、人々は中国以外の広い世界を常に意識<sup>40</sup>しても、中国が中心ではなく、「東にある」ことを認識するようになったのは、より遅いアヘン戦争後、外国との交通が出来てからのことである。要するに、近代中国において、「西」の対となる語は「中」から「東」へという推移の過程が見られ、さらに「東洋」と「東方」は両者とも外国(語)の影響で、新

---

の結果も『清史稿』の三例を除いて、ほぼ全部の用例が「方向」を指す。

39 明治天皇はかつて伊藤博文を「東洋のビスマルク」と呼んだことがあり、大久保利通は〈東洋のビスマルクになる〉という志を立てる。そう考えると、中国語の「東方」は日本語の「東洋」と入れ替えることができるのではないか。

40 『瀛環志略』(1849年成書)が曰く、「坤与大地，以中国為主，疆域之界画，山川之形勢，人人知之，不煩覷縷。〔引用者略〕謹摹皇朝与地全図于卷首，而説不贅焉。」(大地は中国を主とし、中国の境域や山川の形は人々がすでにしり、〔引用者略〕皇朝与地全図を巻首に写し、余計な説明をしない。翻訳：筆者)。

しい意味と結びつけられた。

### 3.3 「東洋」と「東方」の競り合い

中国では、陳独秀のような「東洋」と「東方」を併用する人もいれば、梁漱溟（1893～1988）のような意識的に「東方」を使う人もいる。彼は自著『東西文化及其哲学』（1929年）の中で、orient の訳語として「東洋」ではなく「東方」を使う態度を示した。

李大釗君は私に『東洋文明論』という本を貸した。日本人若宮卯之助がアメリカ人ノックスの本を訳したものだ。原書は書名が「The Spirit of the Orient」で東方文明を論じるが、要点が見つからず、いわゆる東方の精神（Spirit）は全く見つけない。（原文：李君守常 [引用者：李大釗] 借一本《東洋文明論》与我看。是日本人若宮卯之助譯的美國人鬧克斯（George William Knox）的書，原名 *The Spirit of the Orient*。這書雖說是論東方文明的，却尋不着一句中肯的話。所謂東方的精神（Spirit）全然没有。（イタリック体は原文）<sup>41</sup>

この引用文は、三ヶ国語の翻訳の用例が含まれる。まず、orient が「東方」と中国語に訳される。また、orient は日本語の「東洋」である。最後に、日本語の「東洋」をそのまま写しても読者はその言葉を理解することができる。日本語の「東洋」はこのような日本語の本（或はその中国語訳）と共に中国に入ったかもしれない。

今日の中国語圏では、orient の訳語が「東方」である<sup>42</sup>。なぜ「東洋」ではなく、「東方」なのであろうか。

津田左右吉は「西洋はもとより東洋ととも、シナからいふと、すべて諸藩の地であり蛮夷の地であるから、シナみづからが東洋のうちに包含せられなかつたことは、勿論である」<sup>43</sup>という考えを示し、「華」である中国は「夷」と呼ばれる国々と並べられることを受け容れ難いとする。しかし、20世紀30年代まで、中国は自らが orient = 世界の東にあることを受け容れ、「東洋」としてではなく、「東方」として西洋中心の世界に頭をさげたのは事実である。

なおかつ、アヘン戦争後、「洋」という言葉が中国語において特別なニュアンスを持つようになった。最初に「洋」で外国を指す発想は、自国は大陸国で他の国が海洋の中の陸地であるという考えから生じたが、中国人は「洋」を使わず、「夷」という見下す視線が溢れることばで外国人を呼んできた。「大西洋人」と自称するマテオ・リッチは北京で「四夷館」に住まわされたことが、その歴史の傍証である。アヘン戦争後に結ばれた『中英天津条約』（1858年）に、外国人を「夷」と呼ぶことを禁止する条約があり、

41 梁漱溟『東西文化及其哲学』、商務印書館、1999年、P28。翻訳：筆者。梁の東洋、東方の使い分けを提示するため、中国語版と日本語訳を並べた。『東洋文明論』は中国語訳がない。

42 中国学術論文網CNKIの下の翻訳サイト (<http://dict.cnki.net/>) で orient の中国語を検索すると、「東方 (210)、奥連特 (0)、奥里安 (0)」という結果が出る。括弧の中は用例数。(2011年10月6日アクセス)

43 津田左右吉「東洋文化とはなにか」、『シナ思想と日本』、岩波書店、1938年、P109。

その時点で、「洋」は遠いところをしか意味しない普通の単語から、「西洋」という優位のある勢力の代用語までになり、恐ろしい勢力・武力を持つというイメージができた。日清戦争（1894-1895年）で中国が「蕞爾小国」（小さな国）と見てきた日本に破れたことで、中国は日本の明治維新の成果を認めるようになり、日本に大量の留学生を派遣し始めた。日清戦争の三年後、張之洞は「西洋に留学することは東洋に留学することに如かず」、なぜなら、「東文は中文に近く、理解し易い」、「西学甚だ煩雑であり、西学の要に適合しない部分は、東人がすでに削除し、事情を斟酌した」<sup>44</sup> からだと述べた。このように、中国が「中」=中央として、「東洋」（日本）が「西洋」と並ぶ世界の配置と、「洋」という言葉の、遠く離れた憧れのある、かつ恐ろしい存在というイメージが成立した。

こうしたイメージは恐らく、日中戦争での日本人（「日本鬼子・東洋鬼子」）の行動によって、マイナスの面だけが強化され、「東洋」に対しては連帯感・親近感より、嫌悪感・距離感が増していたのであろう。「東洋史」のような日本色が濃い知識も、中国知識人は用心深く眺めた。

一方、「東方」はこのような「東洋」より、はるかによい語である。ひとことで言えば、中国伝統では、「東方」は縁起がよい方向でポジティブな意味しか持たない<sup>45</sup>。

中国人は日本を学び、一時的に「東洋」（アジア）を他の和製漢語と同様に中国語に持ち込んだが、最終的に、「東洋」（アジア）が日本発の学問（特に「東洋史」）の場合に限定的に使われ、学問ではない場合、「東洋」といえば「日本」とあるという回路ができた。

## 終わりに

小論は前近代における orient から中国語の「東洋」を經由し日本語に参入すること、そして近代における日本語の「東洋」と中国語の「東洋」の「言語横断的实践」をめぐるヨーロッパ中心の世界における orient という呼称の変遷の歴史をめぐって考察してきた。

日本は中国より早く「東」にあることを意識し、速やかに「東洋」と「西洋」を使って orient・occident を翻訳し、orient というアイデンティティを内在化した。東洋として西洋に抵抗してから、日本は絶えずに、自らと東洋の関係を再定義していた。「野蛮、未開」と結びついた「東洋」を中国などの他者に位置付けようとした学者もいるし、アジア諸国を「東洋」の名義で親和を呼びかける学者もいる。一方、「東洋」を輸出した中国は 19 世紀中頃まで自己中心的な考えを変えなかった。「西学」という語が 17 世紀前半において外国人によって作られたが、中国知識人はアヘン戦争の勃発まで「西学」を無視していた。その時まで、中国は日本のように「東洋」をもって自己主張、自己肯定するのではなく、「中国」という語をもって「西洋」に抗していた。清末民初、よう

44 張之洞「遊学第二」、『勸学篇』、中州古籍出版社、1998年、P117。翻訳：筆者。

45 陳潔「「東」字起源考及文化成因」、『齊齊哈爾師範高等專科學校學報』、2008年第4期を参考。

やく中国がアジアにあるという意識ができ、「東洋」・「東方」として、「西洋」との関係を考えるようになった。この過程は日本と真逆である。さらに、日本語から来た「東洋」(アジア)と中国語にある「東方」(アジア)の間、併存と競争が存在し、「東洋」(アジア)がとうとう、中国語から姿を消した。

日中両国ともに、「西洋」に面して<sup>46</sup>自己を描き出し、ある程度に「セルフ・オリエンタリズム」の罠に落ちた。日本は「東洋」を再定義することによって、アジアの内部に新たな野蛮と文明の差異を作り出し、ヨーロッパ中心主義の世界に新たな層を構築しようとした。一方、中国では、orient は一時、「東洋」と「東方」として並存していた。これは中国が「西洋」を直輸入し、および日本を経由したことの二重の近代を象徴する。「東方」がようやく「東洋」に取り代わって orient の訳語になる過程はまさに、両国の間にある「東洋」をめぐる攻防である。つまり、積極的に「東洋」を輸出することも、消極的に「東洋」を拒否することも、国のアイデンティティが映る。この攻防には日中両国の異なる自己が伺えるのではないか。

(本稿は、2011年12月10日、上海において行われた国際シンポジウム「文化の越境、メディアの越境——翻訳とトランスメディア」での口頭発表(中国語)したものを加筆修正したものである。この論文にコメントを下された方々に深く感謝致します。)

---

46 孫歌はさらに、この「西洋」も、東方諸国が想像したもので、仮象であると指摘した。